

# 語りづらい体験はどう語られるか

## —終助詞の機能からみる体験談話／体験談話の性質からみる終助詞—

白 川 稜

### 1. はじめに

体験談話というのは、過去に起こった自己の体験、主観的な観察に基づく事実を言語によって再現する作業である。その際、その体験の時期や質によっては、その再現自体に支障をきたす場合があると考えられる。特に、遠い過去の記憶を呼び起こしたり、凄惨な光景を描写したりする必要がある場合、語り手が不安や躊躇といった「語りづらさ」を感じるであろうことは想像に難くない。本稿では、そういった語り手の心理的側面を、話された言語特徴から探ることを第一の目的としている。具体的には、話者の伝達にかかわる態度を表すとされる終助詞の出現状況を確認し、それが語り手のどういった態度を表すものなのかを考察する。

一方で、これまで双方向的な対話場面での働きを中心に論じられてきた終助詞について、一方向的な語りの場面での観察を通して、その機能や効果を新たに捉え直すことも可能である。本稿の第二の目的として、聞き手からの言語的作用が期待できない一方向的な伝達場面において、終助詞がどのような効果を獲得するか、考察することがある。

本稿においては、語りづらい体験の一例として広島・長崎の被爆体験談話を取り上げ、終助詞という言語形式の出現・機能／体験談話の性質・場面性の両岸から、相互架橋的に「語りづらい体験」を取り巻く問題の一端を検討したい。

### 2. 被爆体験談話における終助詞の出現

#### 2.1. 対話・独り言についての先行研究

音声談話における終助詞の出現について論じた研究として、Maynard 1997及び廣瀬・長谷川2010を概観する。Maynard 1997は、独自に採集した日本語母語話者による3分間×20ペアの会話データの中に終助詞<sup>1</sup>がどう表れるかを観察した。結果は表1の通りである。

表1：会話における終助詞の出現頻度<sup>2</sup>

発話総数 <sup>3</sup>	ね	さ	の	よ	な	その他	合計
2112	364	148	138	128	49	36	863
	(17.2%)	(7.0%)	(6.5%)	(6.1%)	(2.3%)	(1.7%)	(40.9%)

この調査から、二人の話者による双方向的な対話の中には約40%の割合で終助詞が

出現し、その中でも特に「ね」の出現数がほかの形式に比べ多いことがわかる。しかし当該研究においては「ね」の出現数が多いこと及びその要因に関して言及がない。

Maynard 1997が対話のデータを扱っているのに対し、廣瀬・長谷川2010は聞き手が存在しない独り言について論じている。

廣瀬・長谷川2010では、24名の日本語母語話者から独り言のデータを収集している。収集にあたっては、被験者を個室に入れ、10-15分間、頭に浮かんだことをそのまま声に出すよう指示し、発話された音声を録音した<sup>4</sup>。収集された音声に出現する終助詞を集計した結果は表2の通りである。

表2：独り言の発話末尾における終助詞の出現頻度<sup>5</sup>

発話総数	ね	さ	の	よ	な	か	その他	合計
3042	458	6	9	5	749	176	80	1483
	(15.1%)	(0.2%)	(0.3%)	(0.2%)	(24.6%)	(5.8%)	(2.6%)	(48.8%)

最も多く出現するのは「な」で終止する形式（24.6%）であり、これは先行研究でも指摘されている終助詞「な」が独り言に現れるという事実<sup>6</sup>を確認するものである。

廣瀬・長谷川が特に注目したのは、次に多く出現した「ね」で終止する形式（15.1%）である。「ね」は従来聞き手存在を前提とした分析がなされており<sup>7</sup>、聞き手が存在しない独り言において出現することは特異に映る<sup>8</sup>。

## 2.2. 被爆体験談話についての調査

白川2017では、被爆体験談話を対象とした終助詞の計数調査を報告している。調査対象は、国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館平和情報ネットワークのWebサイト上で公開されている被爆証言映像のうち、12名・13回分の証言談話である<sup>9</sup>。終助詞の抽出・計数にあたっては、形態素解析<sup>10</sup>により終助詞と認定されたもののうち、発話<sup>11</sup>末（フレーズ末）に出現するもののみを扱い、直接引用や引用節内部に出現したもの、明らかに方言形や誤解析と判断できるものに関しては分析の対象外としている。また、終助詞の延伸、イントネーションは考慮していない。

調査結果を末尾の形式別でまとめたものが、表3である。

表3：証言談話の発話末尾における終助詞の出現頻度

発話総数	ね	さ	の	よ	な	か	その他	合計
3038	1105	0	11	140	21	32	24	1333
	(36.4%)	(0.0%)	(0.4%)	(4.6%)	(0.7%)	(1.1%)	(0.8%)	(43.9%)

この結果を見ると、対話（Maynard 1997によれば17.2%）や独り言（廣瀬・長谷川 2010によれば15.1%）と比較しても「ね」の出現がかなり多い（36.4%）ことがわかる。テキスト処理や計数の方法を完全に共有しているわけではないため考慮は必要だが、「ね」が証言談話に多く出現していることは傾向として認められると思われる。

### 3. 「ね」の機能からみる被爆体験談話の性質

#### 3.1. 「ね」の機能

このことは、「ね」の持つ計算中途性から説明できる。具体的には、金水・田窪1998及び富樫2000を援用し、談話管理理論に代表される話し手の心的処理の観点から検討する。金水・田窪1998では、「ね」の機能を「記憶領域内において命題を断定に導くために行う論理計算の過程にあることの表明（金水・田窪1998：262）」と規定し、「（再計算中）」と名付けている。（1）を例にとる。

（1）いい天気ですね。

（金水・田窪1998：258（2a））

（1）の「ね」は、直接経験的に得た「晴れ上がっている／暑くなく、寒くもない／風は強くない」等の徴証に基づき「いい天気だ」という命題を決定した後、再びそれらの徴証やその時点で気づかなかった徴証と命題とをすり合わせ、妥当性を検証していると説明している。

さらに、富樫2000の論を援用する。富樫2000は非文末に現れる「ですね」<sup>12</sup>という形式を対象に、その文法的／語用論的機能について次のように規定している。

（2）検索処理をモニターする

（3）自分のturnが非円滑に展開する（している）ことを示し、会話参与者に配慮する

（富樫2000：89（a）（b））

通常、発話というものは逐次的に情報を検索しつつその時々の結果を提示していくという方策をとっている。それは、話し手がすべての情報を完全に計算し終えてから発話するという行為が（あらかじめ原稿の決まっている講演等を除き）現実的に困難であると考えられるからである（富樫2000：84）。そのため、検索処理を示す談話的マーカー（フィラーやポーズ）は自然発話において多く出現するが、「ですね」はこれらの形式との共起率が高いと指摘している。また、文の中の出現位置を見ると、述部に近づくほど、つまり確定された発話内容が多くなるほど、出現が不自然になると指摘しており、それらの観察から（2）の機能を導き出している。

加えて富樫は、「ですね」の直後に会話参与者によるあいづちが頻発することを根拠に、語用論的には（3）の機能を導いている。つまり、検索処理の途中にある以上発話の円滑性は低下しており、それについての配慮を聞き手に対して行う必要性が出てくる。そ

の際、情報を提示することで非円滑性を解消することができないため、「ですね」を付与し検索処理の途中であることを明示し、聞き手がそれを確認できるような状態にする、と説明している。

本稿ではこれらの見解に基づき、終助詞「ね」が計算中途という心的状態を標示する機能を有するものとみなす。

### 3.2. 「ね」の頻出が示す談話の性質

当該体験談話は、形としては一対一のインタビュー対話であるが、ターン交替は極めて少ない。インタビューアの質問に対し、インタビューイが長大な語りを続けるという形で体験が語られ、インタビューアの言語行動は非常に限られている<sup>13</sup>。対話においては常に聞き手とターン交替が起こり得、それはつまり、談話全体において参照できる情報源が二つ以上存在することを表す。話し手の情報提供に対し、今度は聞き手だった者が話し手に交替し、情報提供をすることで、会話の参与者はまた新たに提供された情報に基づいて発話を続けることができるということである。しかし、これはターン交替のほば<sup>14</sup>ない当該体験談話では不可能であり、話し手は常に自己の内にある情報のみを参照しながら発話を続けることを余儀なくされる。そのような状況から、語り手は語るという行為に対する種々の不安を抱くことになる。

情報源が自分しかいない中で、自分の主観的体験を語るということは、その発言の精度や客観性の担保がされづらいということを表す。実際、(4)のようにフィラー等を伴い、「ね」を用いながら非円滑的に話す場面が観察される。

- (4) うちね、兄弟が、男が、うう、5人おるわけですよ、ずっと  
ううん、いちにいさんしいごっていつて  
ええ、それから、女がおるんですけどね  
あのお、三菱に、兄たちがあ、入社しましてね<sup>15</sup>

また、客観性の担保という観点からすると、眼前の聞き手とその情報の正確さを共有できるかということも問題となる。そのため、(5)のように語り手が「ね」を用い、聞き手と情報や意見の食い違いがないか、同意を得られるかを確認する場面もしばしば見られる。

- (5) ああ、嫌ですね、戦争は  
国との国との、争いごとですからねえ、我々がどううちゅうことはもうないけど、  
ほんとう、あんまり戦争って、よくないことですよね。うん。  
できたら、ああ、したくもないし、してもいかないし。うん。  
ほうしてまた、原爆なんてまた、使うっていうことがね。うん。  
こんな、いや、死に方って、ないですもんね

うん、嫌ですよ本当  
戦争はもう、全く嫌、したくない。うん。  
そういう気持ちですね、ほんと

以上からわかるように、「ね」が計算中途性を持つという前提に立てば、被爆体験談話における「ね」の頻出はその計算が滞る状況が起りやすいことを示しており、その要因は体験談話の情報源の単一性にあると考えられる。それにより、体験談というものが、発話の精度・客観性に対する配慮と躊躇を伴って思い出され、語られていることが裏付けられる。

#### 4. 体験談話の場面性からみる「ね」の語用論的效果

##### 4.1. 語用論的效果の発現

終助詞等の談話標識類に関しては、心的処理の標示という側面のほかに、語用論的效果を狙った意図的な態度表出の側面があることが指摘されている。

実際の談話においては、談話標識が発話されたからといって、必ずしも「心的状態の標示」、すなわちその背後に何らかの情報処理が存在しているわけではないのである。  
(富樫2004: 49)

話し手は、「ええと」や「あの(一)」を使いながら、実際に演算領域確保や言語編集をおこなっているとは必ずしも限らない。話し手がおこなっているのは、あくまでそうした態度の「表出」にすぎないからである

(定延・田窪1995: 87)

心的処理の標示という基本的機能を認めつつ、意図的に語用論的效果を狙って伝達される場合があることを認めている。これを、富樫2004に倣い「語用論的フィードバック<sup>16)</sup>」と呼称する。

語用論的フィードバックの指摘は、基本的に聞き手の存在を前提とし、聞き手に対して何らかの解釈を要求することによって成立する、という点において一貫している。

(6) ほんとう、あんまり戦争って、よくないことですよね。うん。

((5)より抜粋)

(7) こんな、いや、死に方って、ないですもんね

(同上)

例えば、(6)(7)のような発話が聞き手に対して投げかけられたとき、聞き手は計算途中を標示する「ね」の存在から、「計算途中ということは、まだこれから発話が続く」という解釈ができる。また、そこで実際発話が途切れた場合、「計算途中にもかかわら

ず発話を止めたということは、計算に必要な情報を聞き手に期待している」という解釈を促される。この解釈を話し手が意図的に狙ったとしたら、そこには語用論的フィードバックが働いていると言える。

#### 4. 2. 体験談話の聞き手指向性

しかし、当該体験談話において、「ね」を使って上のような解釈を促すことは考え難い。前節で触れた通り、当該談話は極端にターン交替が少ない。体験を伝えるという性質上、どうしても情報の帰属は語り手の方に偏り、語り手の側からの情報提供がないと継続しづらい談話である。そのそれぞれの役割が明確に自覚されているとしたら、語り手の側からターンを譲渡したり、また奪われないよう牽制したり、聞き手に情報提供を求めたりすることは考え難い。つまり、聞き手に対して計算途中であることを解釈させる動機が薄いと言える。

このように聞き手に対して語用論的に効果を狙う必要がないとき、「ね」の働きとしてまず考えられるのは、非意図的に心的状態の標示をしているだけ、というものである。そもそもの標示機能は基本的に持っていると考えられるため、語用論的フィードバックを用いた意図的な表出を行っていないとしたら非意図的な標示のみをしているというのは自然な考え方である。一方で、もう一つの可能性が考えられる。それは、話し手が話し手自身に解釈を要請しているというものである。再び(6)(7)を例にとるが、これは聞き手への確認というよりは、自己に対する確認や鼓舞のようにも見える。「自分は計算途中なのだから、さらに計算を続けなくてはならない」という、自己確認や自己暗示といった自己に向けた解釈要請があるとすれば、終助詞の語用論的効果・役割はさらに幅広く捉え直されるべきである。

#### 5. おわりに

本稿では、被爆体験談話という語ることに障壁のある談話を扱い、その「語りづらさ」を示す一つの指標として終助詞「ね」を取り上げ、その出現と働きという観点から体験談話という談話形態の特徴について検討した。その結果、体験談話がその性質として体験を思い出すこと、またその体験を事実として語ることに對する躊躇や不安を帯びやすいということを示唆した。

また逆の視点から、一方向的な発話が期待されている談話の中で用いられる終助詞が、話し手指向的な用法を獲得している可能性について指摘した。話し手指向という視点は、終助詞研究における新たな軸となり得るものである。

本稿のひとつの趣旨は、談話と言語形式との関連について論じるとき、談話に付随する要素と言語要素とを双方向的に捉え、総合的に考察することで、談話研究と終助詞研究とが互いに寄与し新たな視点を発見し得るということを主張するところにある。

一方で、本稿の検討については、課題も山積している。形式の面から言えば、フィラー、応答詞、感動詞等、他の談話標識類との共起等から検討の余地がある。また、談

話の面から言えば、話しづらさ、体験からの時間的距離、発話環境等のかかわりについて考慮する必要がある。加えて、当該体験談話の場合語り手によっては数回ないしは数十回の語り重ねや語り直しを経て、時間とともに客観性を確保してきている可能性もあり、この影響についても看過し難い。終助詞の扱い等、捨象している要素も現段階では多いため、より精緻な観察と詳細な検証が求められるだろう。

## 【注】

- <sup>1</sup> Maynard 1997では、助詞を文法的な関係を標示するものと発話内容や聞き手に対する判断・態度を表すもの（interactional particle）に分類している。interactional particleの範囲は一般に終助詞と呼ばれるものとはば一致すると思われるが、Maynard1997は「か」を文法的な助詞と位置付けている
- <sup>2</sup> Maynard 1997：88をもとに作成
- <sup>3</sup> Maynard 1997においてはポーズによって区切られたフレーズを1発話と認定している
- <sup>4</sup> 被験者のプロフィール及び実験の手順は廣瀬・長谷川2010：80-81を参照
- <sup>5</sup> 廣瀬・長谷川2010：83-85をもとに作成。末尾の終助詞に着目して分析を行っているため、末尾の終助詞ごとにまとめた結果を示す
- <sup>6</sup> 森山1997：182-184、野田2002：281等
- <sup>7</sup> 野田2002：278、神尾2002：72-78、伊豆原2003：1等
- <sup>8</sup> 廣瀬・長谷川2010では、Takubo and Kinsui 1997の談話管理モデルを援用し、独り言における「ね」のふるまいは「マッチング」という基本機能で説明できるとしている。マッチングとは即ち「二つの情報の一致」であり、その「二つの情報源は、二人の人物でもいいし、話し手個人の記憶における二つのデータポイントでもいい（Takubo and Kinsui 1997：752）」ということを根拠に、独り言でも「ね」が出現しようと論じている
- <sup>9</sup> 男性6名、女性6名。6-21歳のときに広島もしくは長崎で被爆している。映像収録時の年齢は67-84歳。以下に証言者の名前を列挙する（敬称略）。伊谷周一、岩本千枝子、久保ミツエ、原一（2003年と2013年に2回収録）、住田年伸、生田カツ子、池田道明、天野文子、田村サワ子、米田チヨノ、林田榮、香川清
- <sup>10</sup> Mecab及びIPAdicを使用
- <sup>11</sup> 1発話単位の認定は、ポーズ・イントネーション等によりフレーズが区切られていると判断したものとしている
- <sup>12</sup> ここで検討対象としているのは発話末の「ね」であるため、そのまま援用することには疑問もあると思われるが、富樫の言うところの「非文末」は統語的に見て文末にないということであり、統語的な非文末形式が談話上では発話・フレーズの末尾に現れることは容易に推察されるため、ここでの分析範囲を十分にカバーしている。また、「ね」と「ですな」については同様の形式の敬不敬とは単純にとらえられない側面もあるが、少なくとも富樫2000が検討対象として挙げている「ですな」の用例は、（敬意の有無を捨象すれば）「ね」に言い換え可能であると考え、本発表での議論に十分援用できると判断する
- <sup>13</sup> ただし、インタビュアーの発話は映像上録画・録音されておらず、カット等の編集も行われているため、正確には確認できない
- <sup>14</sup> 仮にインタビュアーによる発話をターン交替とみなしたとして、インタビュアーは基本的に質問行為のみを行っていると考えられるため、情報を提供しているとは言えない
- <sup>15</sup> 以下、出典の明記がない場合は国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館平和情報ネットワーク上の体験談話で観察された用例であることを示す
- <sup>16</sup> 「語用論的フィードバックとは、談話標識本来の機能を潜在化させ、語用論的な効果が顕在化した状態と考えることができる。話し手は意図的に、語用論的な効果のみを相手に伝達するために談話標識を用いるのである。そして、そこには本質的な機能（処理の存在）を見出すことはできない。」（富樫2004：51）



## 【参考・引用文献】

- 伊豆原英子2003「終助詞『よ』『よね』『ね』再考」『愛知学院大学教養部紀要』51 (2), 1-15, 愛知学院大学  
神尾昭雄2002『続・情報のなわ張り理論』大修館書店  
金水敏・田窪行則1998「談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究」堂下修司・新美康永・白井克彦・田中穂積・溝口理一郎共編『音声による人間と機械の対話』257-271, オーム社  
定延利之・田窪行則1995「談話における心的モニター機構—心的操作標識『ええと』『あのー』—」『言語研究』108, 74-93, 日本言語学会  
白川稜2017「語りのmonologueにおける終助詞の出現傾向—被爆者証言における『ね』の頻出に着目して—」日本語文法学会第18回大会, 筑波大学  
田窪行則1992「談話管理の標識について」文化言語学編集委員会編『文化言語学—その提言と建設—』96-106, 三省堂  
富樫純一2000「非文末『ですね』の談話語用論的機能—心内の情報処理の観点から—」『筑波日本語研究』5, 70-91, 筑波大学文芸・言語研究科日本語研究室  
富樫純一2004「日本語談話標識の機能」博士（言語学）学位論文, 筑波大学  
野田春美2002「終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃著『新日本語文法選書4 モダリティ』261-288, くろしお出版  
廣瀬幸生・長谷川葉子2010『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』開拓社  
森山卓郎1997「『独り言』をめぐって—思考の言語と伝達の言語—」川端善明・仁田義雄編『日本語文法体系と方法』173-188, ひつじ書房  
Maynard, S. 1997 *Japanese Communication: Language and Thought in Context*, University of Hawai'i Press, Honolulu  
Takubo, Y. and S. Kinsui 1997 "Discourse Management in Terms of Mental Spaces," *Journal of Pragmatics* 28, 741-758

## 【映像データ所在】

国立広島・長崎原爆死没者追悼平和祈念館平和情報ネットワーク  
GLOBAL NETWORK HP <http://www.global-peace.go.jp/index.php>

## 【付記】

本稿は、筑波大学日本語日文学会第41回大会パネルディスカッション「『語り』の視点—主観と客観の在り方をめぐって」（2018年10月6日、筑波大学）における基調報告の内容に加筆修正を施したものである。ご多忙の中、基調講演・報告をお引き受けくださったパネラーの先生方ならびに当日討議にて貴重なご教示を賜った参加者の方々に感謝申し上げる。

（しらかわ りょう 筑波大学大学院 博士課程 人文社会科学研究科）